

沖

2  
2019

俳句雑誌[巻名]



# 耳

# 袋

能村 研三

## 百日荒行

市川の中山の日蓮宗総本山の一つ  
中山法華経寺は「比叡山・千日回峰  
行」「インドのヨーガ」とともに、  
世界三大荒行の一つに数えられる荒  
行修行道場でもある。

荒行は、毎年十一月一日から翌年  
二月十日までの百日間中山法華経寺  
の大荒行堂と塔頭の一つの遠壽院の  
二箇所で行われ、全国から多勢の僧  
侶が集まり百日間に及ぶ修行が行わ  
れる。

修行僧の一日は、早朝二時に起床  
し、朝三時、一番の水から午後十一  
時まで一日七回、寒水に身を清める  
「水行」と、「万巻の読経」「木剣相承」  
相伝書の「書写行」があり、朝夕二  
回、梅干し一個の白粥の食事の生活  
が続く。

先師登四郎は自身の菩提寺が日蓮  
宗であったことから、荒行に入った  
菩提寺の僧を何度か荒行堂に見舞に  
行っている。

しづかな熱気寒行後の僧匂ふ  
寒行の唳声の中の澄みし声

荒行の最初の三十五日は自行期間  
で、「罪障消滅」といって、ひたす  
ら自分の罪をみつめ滅罪を祈る。こ

冬 靄 に 投 げ し か は ら け 浮 揚 せ る

冬 帝 の 一 瞥 に 遭 ふ 終 刊 誌

八 手 咲 く 日 和 く づ れ の 蛩 の 路 地

靴 底 の 鋏 鳴 ら し ゆ く 小 夜 時 雨

物捨つる弾みつきたり息白し

忙中閑朴の枯木を叩くかな

思慕といふ浮力のありし雪蚩

下戸にして意外な多芸年忘れ

気骨人反骨人の耳袋

雨意迫る影と覚ゆる白障子

の期間が過ぎるとたった五分間の面会が許される。一月に入るといよいよ厳しい規則と厳寒の季節に、白綿単衣又は法衣のみの装束で修行が行われる。

**寒行の燭を揺らせし荒び声**

**所作はみな間髪容れず寒行僧**

二月十日の満行の日も真近になった節分の日に、荒行中に伸ばした髭を蓄えた修行僧が、腹から声を出し経を唱えながら豆を撒く姿は、迫力があり感動する。特に遠壽院は堂内で夜に行われるため、堂内に響き渡る経は霊験あらたかに聞こえてくる。

歳時記には「寒行」「寒行僧」としての表記が一般的で、この中山のお寺の荒行も寒行として詠まれることが多い。しかし寒行というと寒中に太鼓や鉦を叩いて念仏を唱えながら市中を練り歩く修行のイメージが強いので、「荒行」という言葉が季語の一つとして定着してほしいと願っている。

# 冬の蠅

森岡 正作

鶏小屋の隙を塞ぐも年用意  
駆け足の旅に時雨のついて来る  
百歳もみどり子もゐて家小春  
一瞬の翳りや鷹の急降下  
炭焼を訪ね馬刺を奢らるる  
初旅にして雨男返上す  
漱石の髭に隙あり冬の蠅

梅とこい

正月の初夢にはもう遅いがたまには良い夢でも見たいものと、蒲団の中でぐずぐずしていた。そして、昨日のことではあるが、朝刊を取りに出て見た梅の蕾が、もう赤らんでいたことをふと思い出した。玄関の前にある木で、我が家の歴史を見つめてきたような老木であり、何力所か支えられて立っている。それでいて美しく咲き、実に立派な実をつけてくれる。

そうだ、登四郎先生にへ梅といふこの馥郁の和語ひらくという句がある。句の内容と頃合いの良いときに、古木の側に句の立札はどうであろう。さらに連翹が咲くときは連翹の句、そして桜、躑躅、薔薇、椿と先生の御句を借りる。何と名案であろう。きつとそのうち「この家の主は風流人だ」という噂もたつに違いない。ひとり悦に入り、さて誰が筆を執るとなつてさつと正氣に戻り、蒲団を蹴上げたのであった。まさに「一炊の夢」と言うべきか。

# 能村登四郎の軌跡〔6〕

能村 研三

## 夏潮に隠岐見えぬ日は隠岐の翳

『定本枯野の沖』昭33

「枯野の沖」の句を発表した後も、心の晴れぬ不調時代が続き、「馬酔木」風雪集も三か月欠詠することなどもあったが、それを克服すべく大きな旅に出た。昭和三十三年八月伯耆大山に登り、隠岐へ渡った。かつて國學院時代に「装填」という同人誌で短歌をやった石見の牛尾三千夫も訪ねている。十二日間の旅であったが、ここで作った作品を「俳句」に発表している。登四郎は旅について「自分の生き方の不安や自信の無さからくる詩生活の衰退を一番手取り早く解決してくれるものが旅である。」と述べている。

## 第二楽章へ萍のひろがりゆく

『定本野の沖』昭34

「どこかのホテルの庭園で休んでいた時、ふと聞こえてくるシンフォニーに思わずきほれていった。」と自註で述べている。この頃の登四郎は成人を間近にした娘萌子がかかるクラシック音楽のレコードに感化されクラシック音楽に興味を抱いていた。この当時のNHK交響楽団の指揮者のヴィルヘルム・シュヒターの指揮にも魅了されていた。この句、八・五・六の破調の句であるが、音楽に癒されながらも俳句という詩型に試行錯誤を重ねた時期でもあった。このころの作には「啓蟄やかままりし曲すぐ潤ふ」などの句もある。



## くらがりに麦刈りて来し手を燃やす

『定本枯野の沖』昭34

麦刈りの激しい労働を見ていてできた句で、万葉集の東歌の「稲つけばかかる吾が手を今宵もか殿の若子が取りて嘆かむ」の歌が下地になっている句。麦刈りにいそむ夕景、広大な麦畑の彼方で、日が没しようとしている。澄んだ初夏独特の空気はまだ冷たく畑隅の焚火で暖をとった。この句もどこか旅に出た時にできた句であらうか。農夫たちの顔も見えず、差し出した節くれた手からは沈鬱な静けさが漂う。この東歌がモチーフになった句としてはもう一つへ梅漬けてあかき妻の手夜は愛すの句がある。

## 絮毛の旅水あれば水にはげまされ

『定本枯野の沖』昭34

登四郎にとって自らを「冬の時代」と言わしめた昭和三十三年から三十四年には角川新書から『現代俳句作法若い人たちのために』という入門書が刊行された。登四郎は実作者として悩みや迷いを率直に語りつつ、体験から得た信念を、また俳句が人間形成の詩として若々しい生活詩として甦るものであることを盛んに力説している。この句について登四郎は自分としては異色の句と述べているが、新たに「反復の手法」を用いながらもメルヘンの世界にでも誘いこんでくれるような明るい句である。

# 蒼茫集



男 手

辻前富美枝

京の山

辻美奈子

\*男手といふ手勤勞感謝の日  
黄落や人畜無害とはさびし  
開戦日明るすぎたる鼓笛隊  
木枯や時代俯瞰の文庫本  
年詰まる頓挫のままのミステリー  
行く年や減るも増ゆるも無き身内

\*京の山眠るや乱世とくと見き  
音たてて花のやうなる時雨かな  
蕪むし京の町屋の猫真白  
まだ夜のやうな朝なり霜咲けり  
勤勞感謝の日足場組む金属音  
枯野ゆく列車のどこか楽しげな

艇

荒井千佐代

上ル下ル

千田百里

目でありし穴を風抜く鵲の費  
\*生よりも死に近くをり林檎食む  
愛の羽根飢ゑを知らざる子の胸へ  
かけ声で艇を頭上へ柿日和  
竜神へ木橋の軋む冬どなり  
人よりも墓多き村鯉起し

京へ発つ冬たんぽぽの咲く日和  
\*洛中囷に迷うて上ル下ル冬  
堅固なる京都日銀獺期来る  
洛中は賑はひ東山眠る  
露凝るや見返り弥陀の御目また  
十二月八日身ぬちに滾るもの

遠煙り 吉田政江

\*遠煙り這ふ大原の冬菜畑  
琵琶湖疎水冬の都へまつしぐら  
初時雨烏丸通り二つ折れ  
神留守の灯火の赤し式包丁  
不動尊と紐で繋がる小春かな  
侘助や帰る家あり灯しあり

十二月八日 藤森すみれ

小走りにすぎて晩年石露明り  
むらさきの炎の 一花あり菊供養  
大根干す神なる星と一日目  
\*十二月八日 鎌の楔を打ちにけり  
平成も指呼に日記の果てんとす  
しろがねの冬の日燦と八ヶ岳

鍵の向き 宮内とし子

\*短日や手探りで知る鍵の向き  
藁の形残す藁灰冬に入る  
冬の薔薇咲くを拒める薔もつ  
一力の位ある赤壁冬あたたか  
枯るる美の歳月見せる水路閣  
酢莖の香錦市場の右ひだり

楮蒸す 柴田近江

神留守の門太き勅使門  
落合ひの疏水明りに鴨睦む  
冬晴の六角堂は京の臍  
山茶花の辻やひらひら手話弾む  
酒育つ百年蔵へ神還る  
\*楮蒸す五右衛門責めのやうに焚き



# 潮鳴集



銀沙灘

平松うさぎ

見返りの阿弥陀の眼施小六月  
時雨きて波の静もる銀沙灘  
鍋島の赤透く河豚の薄造り  
新刊書平積み高き歳の暮  
\*夜咄やとろとろ灯る和蠟燭

たかぶり

町山公孝

京都三句  
香献じをり名刹に冬とをり  
ほとばしる琵琶湖疏水は冬の白  
三条大橋擬宝珠に文字の浮きて冬  
ミサ曲のたかぶりきたる寒北斗  
\*番台に福の神ある初湯かな

竣工日

菊川俊朗

\*綿虫のみなしがらみを下げて飛ぶ  
凧を掴みそこねし手の残る  
冬薔薇や石に明治の竣工日  
海へ行きたし数へ日の街にゐて  
笑ふ他なき鮫鱈の笑ひけり

洛中洛外図

栗坪和子

\*われもある小春の洛中洛外図  
式包丁の刃空斬る神無月  
銀閣寺石路にはしりの花一つ  
峠まで雪の来てある花背村  
榎の実を旅の切符のやうに置く

# 飛鷹選評



能村 研三

遙かなる海の記憶や 芒原 永尾 春己

万葉集に詠まれた真間の手児奈も、その当時は真間山下まで入江が入り組んでいて海であったことが、万葉歌を読めば分かる。最近の海を埋め立てた土地は別として、百年、千年の単位ではどんな地形が変化し昔は海であったところも現在は芒原となつて「芒」が風になびく様子が見える。作者は芒原が風に靡く姿を見て、海原に湧く波を想像したのだろう。先師登四郎が枯野に「沖」を思い描いたように、一面の芒原に大きな海原を思い描いた。

風無くて音無くて降る 落葉かな 佐川三枝子

風に吹かれて音なく降る落葉、からからと音を立てて落ちる木の葉よりも深い寂寥感がある。植物が成長するために根からすい上げた水と、空気中の二酸化炭素を使って太陽の光の力を借り光合成をすることは、木の葉の大事な役目。しかし秋になつて、まわりの温度が下がり、昼の時間も短くなつてくるとその役目が終り、木の枝から自然と離れてゆく。風無くて音無くてとたたみかけることで、役目を終えた木の葉の静寂感が増す。

炭を足す 炎をあげる 求知心 小形 博子

この句のベースには山口誓子の〈学問のさびしさに堪へ炭を継ぐ〉の句がある。今のような電気による暖房器でまかなう時代とは違つて、昭和の時代は冬は何をするのにも火鉢におこした炭火がたよりであった。つい勉強に熱が入り求知心は増すばかり。その勢いで炭を足したら火は炎をあげて燃え上がった。勉強の情熱が火鉢の火にも乗り移つたのだろうか。

海荒るる 爺のほまちの濁り酒 木村あさ子

「ほまち」はひそかに貯めた金。つまりへそくりを意味するそうだが、「帆待ち」「外待ち」の字を当てて書いた。江戸時代、運賃積み舟の船頭から、運送契約以外の荷物を載せて内密の収入を得たことからこの名がある。作者は青森の人。こうした句はローカルでなければ出会えない一句なのかも知れない。

けふ 髭は剃らず 勤労感謝の日 仲里 貞義

ビジネスマンなど普通の会社生活を送る人にとつては定時に起きて出社前に髭を剃るのが毎日の日課である。対外的にも人に接するには小奇麗に清潔感をもつことが大事だからだろう。今日は勤労感謝の日、休みでもあるのでせめて日常にやや抵抗して髭を剃らないままにすることにした。

金目鯛眼の大きさを 耀られけり 里村 梨郵

金目鯛の特徴と言えば身全体が金色に輝いていることと大きな目をしていること。金目鯛は深海魚で、暗い海の中で生活をしているので、少しでも光を集め獲物を捕らえるために、非常に目が発達していると言われている。

〈以下略〉

# 沖作品



## 能村研三 選

遙かなる海の記憶や芒原

着馴れたる紬のごとき花野かな

冬ぬくし使ひ込みたる雑記帳

雲間からちらつく日差冬紅葉

冬ざるる人の渡らぬ歩道橋

風無くて音無くて降る落葉かな

HAIKU人集ふ小春の芭蕉庵

着ぶくれの並ぶ上野の下り線

落暉いま日箭に浮かべる雪ばんば

うかと出て木枯に頬打たれけり

炭を足す炎をあげる求知心

霜の花松皮の屋根の深眠り

式包丁の鯛の鱭立つ京の冬

走り根にどんぐり弾む鞍馬山

「よぐ来たねしい」と志功の女紅葉駅

福岡

永尾 春己

福岡

佐川三枝子

千葉

小形 博子

\* 刈田いま安堵の彩となりゆけり

海荒るる命のほまちの濁り酒

お大師の長き錫杖冬日濃し

三方は山が砦の冬の寺

鞆の仁王の手脚剥落す

\* けふ髭は剃らず勤労感謝の日

古希越えていま団塊の冬銀河

冬ぬくし千年分の鳥居ぬけ

冬うららじつくり伸ばすふくらはぎ

湯豆腐と決めて詣るや南禅寺

金目鯛眼の大きさを糶られけり

谿間をひたくれなぬの爐紅葉

バックミラーいま狐火を見たやうな

寒海苔の漆びかりを焙りけり

すめらぎの改元ちかし注連飾

青森

木村あさ子

埼玉

仲里 貞義

千葉

里村 梨郵